

店主の独りごと

(第8回)

前日本科学技術ジャーナリスト会議会長・元読売新聞編集委員

小出重幸

「桜前線を楽しむ」、なんと
も日本的な風習です。
今年は低温の日が多かったた
めか、花が長く楽しめたよう
ですが、この前線が津軽海峡を渡
り、5月中旬、オホーツク海を
望む街で最後の開花が伝えら



満開の桜花
五稜郭



弘前城の桜



秋田・乳頭山紅葉

日本人…とは？

れるまでに、2か月近くかかり
ます。その間、今年はどここの桜
を見に行こうか、北に行けば、あ
るいは、標高の高い山岳地方の

か、気温が高すぎないかなど、
気象や生物学の専門家でもな
い人々が、紅葉の発色、山野を

桜なら、まだ間に合うかなど、
さまざまに思案する。人々のこ
ころを揺らす根本にあるもの
は、何なのでしょうか。
同じことは、秋の「紅葉前
線」にも当てはまります。
夏の間から、雨が少なくない

彩る錦絵を心待ちにする。そし
て期待どおりの風光が繰り広
げられれば、それだけでしあわ
せな気持ちになり、さらに詩歌
に詠み、絵画に写し取る……。
万葉集はもとより、谷崎潤一郎
の小説「細雪」にも、「季節の
移ろい」を、ライフスタイルの中
に溶け込ませようとする主人公
たちの人生が、描かれています。

れ、東洋的な視点で地理、気
候、文化、社会を組み立て直し、
「主体的」な自然のはたらき
と、国民性のかかわりを解読し
ようとします。
その視点から、日本人とは何
かを考えてみました。
もしもこの列島に、日本人の
代わりに、言語も肌の色も違
う人々が住み始めて世代を重
ね、いずれ春に桜前線を追い、
秋の紅葉をめぐる、それを歌に
詠み込む、そんな試みを始めた
としたら……。もう、これは日
本人と呼べるのではないでしょ
うか。

自然の美しさ、花鳥風月を
詠むことは、古代中国に原点が
あります。それを取り込みなが
ら、細長い列島地形という日本
の多彩な四季の中で、美を求
める情熱は一層深まった、そん
な印象があります。
フランスの優れた哲学者、オ
ギュスタン・ペルク博士は、気候・
風土と人々の営みには、人間
中心に組み立てられた現代の
「環境学」や「自然科学」では
とらえきれない、複雑な結びつ
きが存在する——という「風
土学」を提唱し、昨年の「コスモ
ス国際賞」を受賞しました。
西洋的な「客観」の世界を離

民族の独自性、という枠を
超えて、より大きな自然、そし
て風土の存在が、あるような気
がしてならないのです。



小出重幸(こいでし
げゆき) 1951
年東京生まれ。科
学ジャーナリスト。
北海道大学理学部
卒。政策研究大学院大学(GRIIPS)客
員研究員。昭和薬科大学講師。よみうり
大手町スクエアで「サイエンス読書カフェ」の
店主をつとめている。

れ、東洋的な視点で地理、気
候、文化、社会を組み立て直し、
「主体的」な自然のはたらき
と、国民性のかかわりを解読し
ようとします。

その視点から、日本人とは何
かを考えてみました。
もしもこの列島に、日本人の
代わりに、言語も肌の色も違
う人々が住み始めて世代を重
ね、いずれ春に桜前線を追い、
秋の紅葉をめぐる、それを歌に
詠み込む、そんな試みを始めた
としたら……。もう、これは日
本人と呼べるのではないでしょ
うか。